

<前回：近代文学5・日本文学>

(1) 聖書から日本文学へ

1. 宗教と文化→キリスト教(聖書)と近代西洋文学
→ 近代日本：近代日本は西欧近代と接続されている。
近世を宗派化を経過せずに。
2. 北森嘉蔵『神の痛みの神学』新教出版社、1946(講談社、1981)
大衆社会・大衆文化
3. 「旧約聖書は特に近代詩への影響が大きい。日本の近代詩壇における最初の個人詩集とされる湯浅半月『十二の石塚』(田中良彦、67)、
「太宰と聖書との関係が深まるのは、一九三五(昭一〇)年、内村鑑三の著書から強い影響を受けてのことである」、「武蔵野病院入院」(70)、「HUMAN LOST」「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなきの程の鮮明さをもて、はつきり二分されてある」(72)、「水の火よりも勁きを知れ。キリストの翳々の威厳をこそ学べ!」(73)
4. 内村鑑三(1861-1930)・無教会と日本文学：有島武郎(白樺派。1878-1923)の場合。
札幌農学校に進学し、キリスト教の洗礼を受ける。内村鑑三の影響。欧米留学後にキリスト教から離れる。『カインの末裔』(1917)
5. 夏目漱石(1867-1916)
・漱石が使用した聖書：改定訳(Revised Version、1898)
・「漱石と聖書との関係は、男女、夫婦をめぐる問題、そこに集約されている人間の罪の問題であったような気がしてならない。」(鈴木範久)

↓

近代社会・近代人の宗教性

(2) 芥川龍之介(1892-1927)

7. 「芥川龍之介とキリスト教との触れ合いについては、まず青年期にさかのぼって、芥川の残した習作や書簡等を通して読みとることが出来る」「習作「老狂人」(7)、「中学時代に郷里の松江教会のバイブルクラスに通っており」、「室賀文武」「無教会主義のキリスト者」、「大正三年頃」「基督に関する断片」「はじめて『新旧約聖書』を熟読」
8. 「西方の人」「続西方の人」(1927)
・「聖書を熟読し、クリストという鏡の中に自分を発見している」「ジャアナリスト兼詩人」「人の子」「私生児」「貧しい人」「民衆」。「芥川は自分自身を「ジャアナリスト兼詩人」であり、狂気の母を持ち出生の秘密を持つ「貧しい人」「民衆」に近い者であり、クリストが指し示した「現世の向こうにあるもの」、「未来」を夢見る「無限の道」を走る人であると思っていた」(281)
11. キリシタン物、殉教者：「尾形了齋覚え書」(1917)、「奉教人の死」「邪宗門」(1918)、「きりしとぼろ上人伝」「じゅりあお・吉助」(1919)、「黒衣聖母」「南京の基督」(1920)
12. 「奉教人の死」、アガペーとエロス

(3) 遠藤周作(1923-1996)

13. キリスト教と女性的なもの(女性一身体・物質一悪)
正統キリスト教における三位一体のもつ深層心理学的な問題
14. 「私の考えている宗教というものに、二つの種類がある」、「一つは父の宗教であり、一つは母の宗教である」→ 遠藤周作文学の基本構想：父の宗教から母の宗教への転換。

13. キリスト教と映画

0. 「文化の神学」：宗教と文化は区別されつつも密接に関連付けられる。

1. 現代文化を代表する映画：キリスト教思想の観点からいかなる評価が可能だろうか。
欧米文化の内実にはキリスト教・聖書が深く関わっている。これは、文学だけでなく、映画においても。

(1) 映画の意義

2. 「科学技術の神学」→ベルナール・スティグレールの「技術の哲学」

「技術の哲学」（「技術と時間」シリーズの第3巻目までが、法政大学出版局より邦訳出版）。

3. 古代ギリシャのエピメテウス神話。人間（＝「死すべきものたち」）を、本質的特質が「欠如」した存在者と捉えた上で——ゲーレンの言う欠陥生物——、技術とは人間がその欠如にもかかわらず生存するために必要な人工物（人工器官）であると説明する。

↓

技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間は技術によって人間として構成された技術的存在。

4. 記憶を世代から世代へと伝えるための技術。

図形や文字は、先行する世代の記憶を外在化し、それを次の世代が内在化することを可能にする技術。

5. 現代の科学技術は、視覚と聴覚のアナログ的総合の技術（写真と蓄音機）を経て、デジタル化へと到達。ここに映画は位置する。

↓

記憶技術が産業の管理下に置かれるというプロセスのいわば完成＝現代は、「記憶の産業化プロセスの時代」。

6. 記憶と意識が産業化と商品化のプロセスに全面的に組み込まれる時代を、「精神の歴史上の一大危機」と捉えている。技術としての映画の光と影。

7. スティグレール『技術と時間3——映画の時間と〈難-存在〉の問題』（法政大学出版局、2013年）

「映画では、テキストの筋を見失わないように注意している必要はない。テキストなどないのだ。もしあるとしても、求めずともわれわれの中に入ってくるものだ。それはわれわれの時間を結び合わせ、九十分あるいは五十二分の無意識的意識——これが映画の観客という、奇妙にも、運動によって不動となった存在を特徴づけるものだ——の時間となる。」(23)

「1 映画という記録は写真の拡張である。」(23)

「撮影の一瞬が撮影されるものの一瞬と一致するのであり、この一致に、過去と現実の結動の可能性が基づいている。」

「2 トーキーになると、音声的記録も統合されることになる。」

「映画が音声を持ちうるのは、映画それ自体が、・・・固有の現象学的分析に関わる時間対象だからである。映画は、メロディーと同じく、本質的に流れなのだ。」

「この時間対象は、流れとして、それを対象する意識、すなわち、観客の意識の流れと一致する。」(24)

8. 意識＝イメージの流れ（時間感覚）、映画＝イメージの流れ。両者のシンクロ。

↓

映画の両義性。映画は解放する、自由にする、と同時に不自由にコントロールする。

9. 聖書が描く人間の両義性は人間の営みである科学技術にも妥当する。この両義性を前提にすると、次のような問いが生じてくる。原子爆弾は悪、原子力の平和利用である原発は善という議論は可能か。i P S細胞などの遺伝子工学は善と悪のどこに位置づけられるべきなのか。

「近代技術の意味は両義的なのである。それは、思考の障害であると同時に究極の可能性として現れるのだ。」(ベルナル・スティグレル『技術と時間1 エピメテウスの過失』法政大学出版局)

10. 栗林輝夫「キリスト教は原発をどう考えるか——神学の視点から」(西原廉太、大宮有博編『栗林輝夫セレクション1 日本で神学する』新教出版社、2017年、所収)で、「神学的に言えば、技術とは人類が墮落した後に過酷な環境を生き抜くため神から与えられた力」とした上で、聖書には二つの技術が描かれていることを指摘。

↓

人間に求められるのは、栗林が述べるように、生命のために「技術を見極める知恵」。

(2) 聖書と映画

11. 『キリスト新聞』(キリスト新聞社)に連載されていた、服部弘一郎の「映画の中のキリスト教」(神なき時代のキリスト教映画/イエスのいないキリスト列伝)

12. イエスのいないキリスト列伝(7): 22-23

・「カッコーの巣の上で」(1975年、アメリカ、監督:ミロス・フォアマン、主演:ジャック・ニコルソン)

効率優先の管理主義に陥って患者の人間性を抑圧する精神病院にやってきた男マクマーフィ(ジャック・ニコルソン)が、患者を支配する看護師長ラチェッド(彼女は自分の行為が正しく患者のためになっていると思っており、それだけに情け容赦がない)と対決する物語。現代の抑圧の象徴としての病院(職場、学校、家庭も)。

本当の悪は、善意の姿を偽装する。イエスを捕らえ殺そうとして人たちは宗教熱心な人たち。かれらにとって、イエスは社会秩序の破壊者に見える。

マクマーフィは自分一人なら逃げられるチャンスがありながら、仲間たちといることを選ぶ。

13. イエスのいないキリスト列伝(15) 46-47

・「ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団 はばたけ天使たち」(2011年)

1989年公開の『のび太と鉄人兵団』のリメイク。ロボット帝国の祖先が「アムとイム」であるなど、オリジナル版もキリスト教的素材が用いられていたが、リメイク版はさらにそれが強調。

14. 聖書に固有な「物語の型」→文化。

それはキリスト教圏の人々の心に深く根を下ろし、新しい創作においてもしばしばその型をなぞることが起こる。

明治以降の日本は、海外の文学や芸術を輸入することによって、この型も取り入れてきた。日本映画でもこの型と通して間接的に聖書の世界を再現することが起こる。

ロボット少女リルは、当初は人類奴隷化を目的に地球に送り込まれてきたが、やがて人類を救うキリストの役目を担うようになる。世界は彼女の自己犠牲によって救われる。

のび太は復活したリルの姿を見て歓喜に包まれる。

15. 聖書の型・モチーフを組み込みあるいは再現(アレンジ)する。

ターミネーター、スーパーマンとキリスト。

16. 聖書物語を直接素材にする。
- ・セシル・デニム監督『十戒』(1956年)
 - ・ノーマン・ジェイソン監督『ジーザス・クライスト・スーパースター』(1973年)
ロック・オペラ
17. 聖書的な思想・考えを含む。
- ・映画『塩狩峠』(中村登監督、1973年)は三浦綾子による小説を原作とする映画。小説は塩狩峠で発生した鉄道事故の実話を元に、日本基督教団出版局の月刊雑誌『信徒の友』に掲載。塩狩峠の主人公のモデルである長野政雄が自ら線路に飛び降りて、小説の永野信夫と同様の自己犠牲の死を遂げたと言われる。
18. 長野政雄は鉄道の庶務主任として働いていました。その一方で、彼は熱心にキリスト教を信仰していました。キリストの教えに従い、彼は無償の愛を人々に与え続ける人生を選んだ。彼は常日頃、自身の遺書を携帯。常に死を意識し、日々の生活を充実なものとする。事故の日に旭川行きの列車に乗るが、列車が塩狩峠を登っている最中に連結器が外れ客車が急勾配の峠を下ってしまう。長野政雄はハンドブレーキがあるのを素早く見つけ、それでブレーキをかけたが、ブレーキの力が足りず、列車は完全に止まらない。しかし、「ゴトッ」と鈍い音とともに列車が完全に停車。乗客が車外に出てみると、そこには無残な姿の長野の遺体。
19. 自己犠牲的な隣人愛というテーマ
20. 岡田温司『映画とキリスト』
- 「映画とはそもそも宗教的なものである。ここで「そもそも」といったのは、物語のテーマや内容いかんにかかわらず、それ自体において本来的に、という意味である。つまり、映画そのものがある種の宗教性を帯びているということだ。このことはまた、製作と鑑賞のどちらにも当てはまるし、製作者や鑑賞者が信仰をもつか否かを問わない。しかも、何か特定の宗教に限られたわけではない。」(8)



ティリッヒ：広義の宗教と狭義の宗教

広義の宗教芸術・絵画と狭義のいわゆる宗教芸術・絵画

<参考文献>

1. 服部弘一郎+編集部『シネマの宗教美学』フィルムアート社。
2. 服部弘一郎『銀幕の中のキリスト』キリスト新聞社。
3. 岡田温司『映画とキリスト』みすず書房。
4. 栗林輝夫『シネマで読む旧約聖書』日本キリスト教団出版局。
5. 栗林輝夫『シネマで読む新約聖書』日本キリスト教団出版局。
6. 木村佳楠『アメリカ映画とキリスト教——120年の関係史』キリスト新聞社。
7. 三浦綾子『塩狩峠』新潮文庫。
8. 柳田勝英『潜入閉鎖病院——「安心・安全」監視社会の精神病院』現代書館。
9. イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』東京創文社、『脱病院化社会——医療の限界』晶文社。
10. 井上章一『キリスト教と日本人』講談社現代新書。
11. ベルナルド・スティグレル『象徴の貧困——1 | ハイパーインダストリアル時代』、『愛すること——「自分」を、そして「われわれ」を』、『偶有からの哲学——技術と記憶と意識の話』。いずれも新評論から出版。